

# 目白学園高等学校における 交換留学生の日本語習得に関する考察

—短期受け入れ留学生を通して—

Japanese Language Acquisition by Exchange Students at Mejiro Gakuen High School

—A Report on the Short Term Student Exchange Program—

後藤倫子 森本治子

(Noriko GOTO Haruko MORIMOTO)

## I. はじめに

目白学園高等学校では、「国際性を育む教育」を目標の一つに掲げ、その実践の一環として、交換留学制度を設けている。現在はカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスの4カ国の姉妹校・提携校と交換留学を行い、幅広く国際交流の場を提供している。

本校の交換留学制度は、1990年にカナダのブリテッシュ・コロンビア州のウェストバンクーバー・セカンダリー・ハイスクール、コリンウッドスクールとの提携を皮切りにして、1995年にはオーストラリア、ニュージーランド、イギリスを含む4カ国、17校に広がっていった。現在では学校内で外国人留学生は日常的で、自然な存在となっている。

2007年度までに、242人の留学生を本校から派遣し、176人を海外の姉妹校から受け入れている。カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの海外姉妹校からの留学生の出身地は、左記のほか中国・台湾・シンガポール・インド・イラン・パキスタン・韓国で、異文化交流のよい機会になっている。

## II. 交換留学生の受け入れと生活状況について

国際理解教育プログラムを実践するための教員の分掌組織として1990年に国際教育部を設置し、交換留学の窓口となっている。現在日本人教員4名、外国人教員2名、日本語担当の非常勤講師1名が所属している。海外姉妹校との契約や交渉は、学園本部の全面的なバックアップを受けている。海外姉妹校の選定には佐藤学長が自ら現地に足を運び、先方の校長や教育長などの責任者と会い、視察を重ねた。海外姉妹校との連絡は、国際教育交流センター所属の国際教育コーディネーターが、国際教育部の教員と連絡をとりながら行っている。海外姉妹校へ向けた英文ニュースレターである「Mejiro Exchange」を年に2回発行し、本校の生徒や受け入れ留学生の学校生活を紹介している。本校の短期（10週間）派遣留学生と受け入れ留学生は原則として相互交換であり、互いの家庭でホームステイをすることにより、密接な交流を行っている。受け入れ留学生とホストファミリーとの会話は、日本語を使い、日本語の授業においても英語を使わず、日本語で指導している。帰国後に学習を重ねて、日本語のスピーチコ

ンテストや検定試験に挑戦する生徒も多い。

受け入れ留学生（以下、留学生）は高校1年生または2年生のホームルームに所属し、日本語学習を核に英語・芸術・体育は本校の生徒と一緒に受講している。またホームルームでは自国の文化や学校について紹介し、本校の生徒の交換留学や国際交流への興味や関心を高めている。運動会などの学校行事やクラブ活動には一緒に参加している。ホームルームの生徒も留学生の世話をして、留学生が日本の生活文化に速やかに適応できるように協力している。

留学生は、毎週1回、浅草、皇居、国会議事堂、防災会館、都庁の見学や、歌舞伎鑑賞などの校外学習に出かけ、日本の文化や伝統を学ぶ。留学生は、滞在中に約7回校外学習を経験するが、事前にオリエンテーションを行い、各自で校外学習の記録に記入している。（なお、日本語教育界では1年未満の高校生の留学をすべて短期留学とすることが多いが、本校では10週間の留学を短期留学と定義している。）

### Ⅲ. 本校の日本語教育について

近年、日本語教育界における日本国内の中等教育課程では、JFLよりJSL研究がさかんである。JFLとはJapanese as a Foreign Languageの略であり、JSLはJapanese as a Second Languageを意味する。この二つの意味の違いは大きい。JFLは外国語としての日本語を指す。学校教育における外国語学習であったり、学習者自らが日本語に興味を持ち、語学塾などで学習を始めたりする言語のことである。つまり、母語以外の言語を通じて他文化を意識し、自文化をより理解しその違いを学ぶ、学習者の人間形成に重きを置く言語教育である。これに対し、JSLは学習者にとっての第二の言語を示す。学習者本人の興味如何に関わらず、親や家庭の事情などにより日本に定住しなければならない外国人児童生徒の言語教育がこれにあたる。生活や学習に役立つ語学力を身につけなければならない、言わば「生きるための日本語学習」である。

本校における日本語クラスも近年このJFLとJSLのどちらも存在するが、今回はJFLに属する交換プログラムの日本語習得に焦点をあてる。また、交換プログラムには1年留学と短期留学の二種類があるが、近年は短期留学が主流となっている。短期留学の日本語クラスを通じて、留学生の日本語習得事情をここにまとめ、今後どのように充実させていくかを考えてみたい。

#### 1. 日本語クラスのカリキュラムについて

日本国内における高等学校の留学生受け入れに関する研究はいまだ少数である。その研究のほとんどは異文化間教育や国際理解教育の観点からのものが多い。鳩（2004）によると、受け入れ留学生の日本語教育に対して問題提起が見られるのは塩沢（1991）からであり、この問題を本格的に取り上げたのは村野（1993）であるとしている。村野（2001）では、それまでの研究が詳細にまとめられている。村野（2001）や鳩（2004、2005）では、受け入れ側の

学校の問題を指摘しているが、日本語教育の観点からは「受け入れ校の外国語としての日本語教育に対する認識が不足している」、「日本語指導において、体系的指導が困難」を問題点としている。一方で、「専門知識を持つ指導者が指導に当たるケースは非常に特殊で恵まれたケースである」ことを指摘している。

筆者（後藤）が交換プログラムの日本語クラスを担当し始めたのは2002年4月以降である。その当時、本校では留学生を受け入れる組織が先述の通りすでに学校全体で整っていた。各担当教員が連携して仕事をこなし、互いに連絡を密に取り合える状況にある。ホストファミリーの決定と留学生滞在中のさまざまな問題を解決する係（国際教育部教員）、留学生のための時間割作成および各教科の授業を調整する係（留学生担任）、留学期間中の生活カウンセラー（英語母語話者である国際教育コーディネーター）、日本語クラス担当者（後藤）、そしてそれらを統括する教員（森本）がそれぞれに受け入れ留学生を支援する。これは先行研究で記されている留学生受け入れ校の現状と比較すると、極めて恵まれた体制であると言える。

日本語クラスのカリキュラムをたてるにあたっては、日本滞在中の全ての時間が日本語習得の機会と捉えるべきである。そのことから留学生へ向けたテーマは「日常生活で臆することなく日本語を使えること」としている。もちろん、来日する生徒の日本語レベルはさまざまであり、個々のレベルに合う目標を各自がたてる必要があるが、これは10週間という短期間ではどのレベルの生徒にも共通する有効なテーマであると言える。そして、このテーマを実現させるために以下三つをねらいとしている。

- (1) 自国での学習事項を定着させる
- (2) 日本語を使う機会を多く与える
- (3) 日本文化に直に触れ、日本語と文化を双方から学び理解する

来日する留学生の2割ほどはゼロ初級（目標言語をそれまで全く学習したことがない学習者）であるが、8割はすでに1～5年日本語学習を行っている。もちろん、国や学校の違いにより進度はさまざまだが、インプットされているものはかなりある。自国ではなかなか日本語を発する（アウトプット）機会が与えられないことから、インプットされている学習事項をできるだけ引き出すことによって、自国での学習と留学中の学習が繋がっていることを意識させる。これが(1)の根拠である。(2)に関しては、教員側が意識的に日本語を使う機会を提供するのである。知っている言葉は数えるほどしかなくても、学習済みの言葉を組み合わせる巧みに話す生徒もいれば、多くの言葉を知っているにもかかわらず、日本語使用に消極的な生徒もいる。特に後者のような生徒には話し始めるきっかけ作りとなる。詳細は次項で説明する。(3)は留学生を受け入れているホストファミリー、そして学校生活ではホームルームが大きく関与する。日本の家、日本の食事、団欒方法、教室のあり方、日本語以外の教科学習、日本の高校生の生活など、日常生活を通じて自文化と日本文化を比較する機会となり、異文化の面白さ、違いなどを肌で感じる事が大切である。「日本文化は〇〇である」というようなお仕着せの説明から文化理解を行うのではなく、生徒自身が訪ねた場所や交流した人々から感

じる異文化体験が重要である。留学生によってそれぞれの感じ方があっていい。

以上、三つのねらいを実現させるために、教員は次のことを意識しなければならない。「留学生の意欲をいかに引き出すか」と「日本語クラス（以下、教室）と日本語クラス外（以下、教室外）の活動をいかにつなげるか」である。学習する主体は留学生であり、留学生自身がそれを意識していく手助けをすることが大切である。また、教室活動だけでは日本語習得は難しく、日本語のスキルを高めるためには教室外活動が多分に影響する。具体的な方法は、以下「2. 授業の進め方」「3. アクティビティとプロジェクト」にて紹介する。

## 2. 授業の進め方

「放っておいても子供は言語を習得する。」や「教室に入れてしまえば自然と日本語が分かるようになるだろう。」という認識は、初等教育の学齢期には該当する場合もあるであろう。しかし、中等教育の学齢期にはもはや不可能である。言語習得の立場では、12～13歳を越えると母語の習得（第一言語習得〈the First Language Acquisition 以下FLA〉）が困難と言われている。これはLenneberg（1967）の臨界期仮説（Critical Period Hypothesis）である。言語を習得するのに最適な年齢があり、その年齢を超えると言語習得が次第に困難になるという考えに基づいている。この考え方は第二言語習得（the Second Language Acquisition 以下SLA）でも有効とされている。Selinker（1978）はSLAには、「音声」や「文法」など言語の領域に異なる臨界期があるのではないかと提案している。これを複数臨界期仮説（Multiple Critical Period Hypothesis）と言う。例えば、目標言語を長年学習していても、話すとき発音に母語干渉がみられることはよくあるが、その一方で文法は母語話者のような能力レベルに達することもある、ということである。また、近年ではこの臨界期はもっと早い時期にあるとする考え（Long 1990）もある。留学生たちはこの臨界期を越えた14歳～17歳で来日する。

SLAの際には言語学習ストラテジー（Oxford 1990）が使用される。言語学習ストラテジーとは、言語学習を効果的に行うために使用する方法であり、これらのストラテジーを使用することにより、言語能力の向上と自律学習の促進につながるという論理である。これには直接ストラテジーと間接ストラテジーがあり、前者には「記憶ストラテジー・認知ストラテジー・保障ストラテジー（復習する、練習する、推測する など）」が、後者には「メタ認知ストラテジー・情意ストラテジー・社会的ストラテジー（学習計画をたてる、勇気づける、協力するなど）」がある。それぞれのストラテジーのグループが相互に関連して依存しあうことにより、言語学習が進むという考えである。そしてSLAではこれらのストラテジーを多くの学習者が用いている。しかし、留学生の学齢期ではまだ途上の段階である場合が多い。田中・斎藤（1993）では学習者による学習目標と学習過程の意識化の必要性が述べられているが、中等教育の段階にあっては、できるだけ早い時期にこのストラテジーを意識できるようになる方向づけができればいいのではないかと筆者（後藤・森本）は考えている。

### (1) 10週間の学習プログラム

2002年当初、必ずプレイスメントテスト（筆記試験と面接）を行い、レベル分け後に授業を開始していた。また目白学園の生徒と同様に中間試験と期末試験を実施していた。この一連の流れは筆者（後藤）のそれまでの大学での日本語教育の経験をそのまま当てはめていたように思う。

2004年からはこの流れを大幅に変更してみた。その理由は大きく三つあった。一つ目は日本語教育の専門家が増えたことである。国際教育部所属の教員が、交換教員として赴任していたカナダから帰国し、授業の進め方に幅を持たすことが可能となった。二つ目は留学生の人数が減少したことである。それまでは各学期5名から10名近くいたため、全員が同レベルであることはなく、1クラスに2レベル、3レベルのグループを作るいわゆる複式学級となるが多かった。減少したことで目が行き届き、レベル分けをせずとも工夫次第で授業が行えるようになった。三つ目は、「使える日本語」を重視したことである。10週間という短い期間に大きな目標をたてるより、日本での生活に密着した「使える日本語」を念頭に授業を進めることにした。実際に使える、特に話せるようになれば日本での生活は楽しくなり、また帰国後も日本語学習を継続したいという意欲につながるであろう。以上のことから、プレイスメントテストは面接のみを行い、定期試験は実施しないことにした。それに代えて各々の留学生の日本語に対する興味や意欲を引き出す工夫をするように心がけた。

面接では個人のレベル把握はもちろんのこと、日本語のどんな勉強をしたいのか、この10週間にどんなことをしたいのかなど、学習面そして学習以外のことも細かく聞き書き留めておく。彼女たちの興味ある分野を授業の内容に反映させるためである。全員の興味が必ず一回は取り上げられるように工夫している。

また、初めの授業には自分の目標を用紙に書かせることにした。これは、メタ認知ストラテジーを意識して導入している。つまり自身の学習は自身で計画し、実行していくストラテジーである。例えば、漢字は〇〇個覚える、ホームルームの友だちと日本語で話すようする、買い物に行ったら、日本語でやり取りする…など自由に書かせる。これを教室の所定の場所に張っておく。そして留学期間中にときどき確認させる。こうすることによって足踏み状態の学習への打開や、意欲の再確認を行うことができる。最後には自分の目標が達成されたかをクラスで確認する。漢字の学習数は当初の目標を超えることが多く、これがやる気につながるようである。目標を達成するために努力し、続ける大切さを実践して体得することにより、そのやりがいを実感する。これは、各自が掲げた目標を計画的に遂行できる能力の育成につながっていくものである。達成できなかった場合は内省を行う過程を身につけることを促している。これも言語学習には大切なストラテジーである。

### (2) 1週間の授業の内容

過去5年間、日本語クラスは週10～12時間（1時間は50分授業）あり、うち8時間の授業

の流れは1週間で一まとまりを目指している（資料1「日本語」参照）。文法（2時間）・会話（2時間）・文字（1時間）・まとめとクイズ（1時間）を基本とし、進捗や状況によってプロジェクトの準備（1時間）・プロジェクトの発表（1時間）、あるいはアクティビティ（2時間）のどちらかを行う。

授業は基本的に構造シラバスで進めている。文型を中心に易しいものから難しいものへと積み上げていく方法である。「文字」はその単元に出てくる新出漢字を意味する。週に5から10個覚える。口頭練習を優先して、口が慣れたらその単元の「会話」練習を行う。はじめはCDを聞いて復唱するが、後で確認のために会話文を読む。文字を読むいい機会となる。週後半には必ずクイズ（小テスト）を行う。以上が基礎となる学習分野である。これらの授業では、教科書に『*Japanese for Young People*』（講談社インターナショナル刊）を使用している。この教材は教科書とワークブックで構成されている。採用理由は四つある。主人公が一年留学のアメリカ人留学生ということで境遇が似ていること、内容が学校生活とホストファミリーとの生活での出来事を中心にまとめられていること、口頭練習に役立つイラストが豊富なこと、そして、ワークブックが各単元の内容確認に適当な分量であることである。「自国のテキストよりいい」と留学生にも評判がいい。

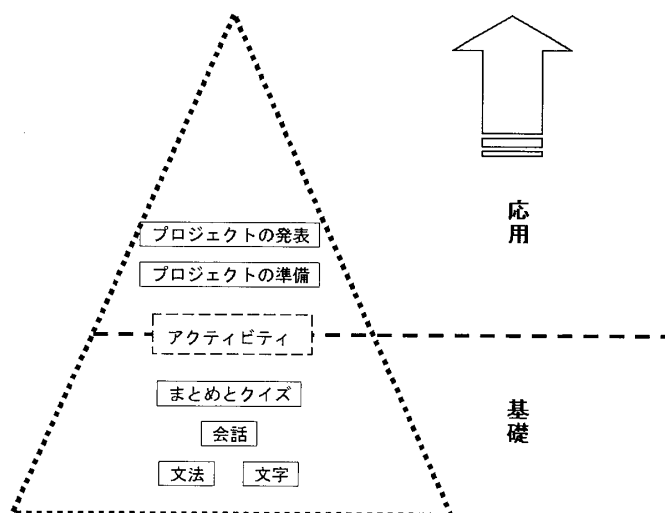
「アクティビティ」とは、日本語を使った活動を行うクラスである。通常の教室活動から少し離れて、遊びを交えたり日本文化紹介をしたりして、気分転換や異文化体験を意識している。また、基礎レベルから応用レベルへの架け橋になる内容を扱うこともある。年少者、成人対象の言語教育の間で、幼稚な活動を避け、あるいは知的レベルを高く設定しすぎないように工夫している。

「プロジェクト」はその名のとおり、留学生自らの力量が要される授業である。今までに学んだものをアウトプットする機会となる。課題をこなすには日本語でインタビューをしたり調べたりまとめたりしなければならない。4技能（「聞く」「話す」「読む」「書く」）を全て使い、

基礎力が定着しているかどうかを試される場でもある。以上、8時間の授業の流れを図に表すと図1のようになる。

8時間の日本語クラスのほかに自習時間が週2～4時間ある（資料1「自習」参照）。これは、留学生担任が空き時間を利用して監督・指導している。この時間は先述の8時間のシラバスとは角度を変えた指導のもと、既習の文型を用いた日記や手紙の書き方など、

図1 日本語クラス1週間の授業の流れ



主に「書く」ことに重きを置いている。中でも2004年から留学生学級でも採用した学級日誌の効果は、以前に比べて書く能力に格段の伸びが確認されている。教科名や感情表現の定着が早まり、文型においては現在形、過去形の違い（行く・行った、おもしろい・おもしろかったなど）を正確に区別するよい機会となっている。初めのうちは英語表記の見られた日誌も、最後には日本語のみで書かれるようになる。

一方、この時間は自習時間となることもある。学習の速度は人それぞれであり、得手不得手の分野も様々である。この時間には、これまでに学習した文型や文字を各自のペースで学習したり、ノートをまとめたりすることができる。宿題を家に持ち帰らず、分からないところはその場で教員や仲間を確認することができる利点もある。自らの学習の進め方を意識させ、自律学習を目指した指導が可能である。

### 3. アクティビティとプロジェクト

実際の授業にて、これまでに行ったアクティビティとプロジェクトを紹介する。

#### (1) アクティビティ

ここでは、留学生が一同に会して授業を行う。これは構造シラバスの授業と異なり、異文化体験、基礎から応用の架け橋になる内容を扱うほか、日本語独特の言い回し、机上だけでは定着しづらい表現など、伝統的な遊びと組み合わせることで、知らず知らずのうちに覚えることを目的としている。レベルの異なる者同士が助け合って日本語の理解を深めていくということもできる。以下五つは実際の授業で行ったものである。

##### ① 日本の家庭にある家具や雑貨の名称を覚える

和室にはふすまや押入れ、欄間、縁側など、台所にはしゃもじやおたまがある。イラストを見ながらホストファミリーの家にはあるかどうか、どうやって使うのかなど確認しながら名称を覚えていく。覚えることが目的ではない。どんなものがあり、どう使うのかを知り、そのうちのいくつかがホストファミリーと共有できる話題のきっかけ作りになればいい。

##### ② 助数詞を覚える

日本語を長い年月学んでいても、助数詞（一つ、一匹、一台、一枚など）の数え方を苦手とする留学生は多い。そこで、日常よく使う助数詞を、紙風船を使って覚えさせる活動を試みた。予め絵カードを用いて口頭練習をした後、椅子を移動させて円陣を作る。紙風船を落とさないように打ち、何回続けられるか数える旨を伝える。はじめにその風船を打つ者が「一つ」と言う。次に風船に触る者は「二つ」と言って、順に「十」までつなげられるようにする。初めのうちは数え方が発せられず続かないが、何度か繰り返しているうちにいつの間にか数えられるようになる。紙風船を用いることで文化紹介にもなる。

##### ③ 位置を表す語彙（上、下、右、左）を覚える

絵カードなどで予め語彙を復習したあと、視力検査のポスターを用意する。上、下、など基

本語彙がすらすらと言えるようになったら、次に「斜め右下」などの応用表現も取り入れる。

④ 早口ことば

どのレベルの生徒にも受け入れられる楽しい活動である。簡単な早口ことばをいくつか紹介し、意味を教えるから口頭練習を行う。帰宅後にホストファミリーに披露するなど、コミュニケーションをとるきっかけ作りをしている。留学生の母語の早口ことばを紹介しあう時間に発展することもある。

⑤ 昔話を使って再話する

ビデオで昔話（『桃太郎』『かぐや姫』など）を見せ、それを自分の言葉で再話させる。留学生のレベルによって準備するタスクを変えている。ゼロ初級には知っている日本語の聞き取り（「ありがとう」や「行ってきます」など）と、どんな話か英語でストーリーを書かせ、初級後半の生徒には内容把握の簡単な日本語の問いを、中級以上のレベルには日本語でストーリーを書かせるタスクを与える。

(2) プロジェクト

このクラスでもレベル分けをしない。各留学生が自分のレベルに合った表現を、これまでに学習してきたことをいかにアウトプットできるかがねらいである。また、毎回ホストファミリーにもかなり協力してもらっている。留学生が積極的にホストファミリーと話す機会が得られるようにという期待もある。以下三つを紹介する。

① ホストファミリーの紹介

自分のホームステイ先の家族をクラスメートに紹介するタスクである。ホストの名前、仕事、年齢、趣味などをインタビューするための質問作りから始め、それを聞き取り書き取る力、そして最後に作文にしてまとめる力を要する。

② 日本の祝日

日本の祝日はいったいどのくらいあるのか、カレンダーを見ながらホストシスターに質問する。初級の場合は、その祝日が何の日であるのかを調べるタスク（質問例「1月1日は何の日ですか。」）、初級後半には具体的な祝日の名前や一年に何日祝日があるのかを聞くタスク（質問例「日本には一年に何日祝日がありますか。」）、中級以上は自国の祝日と比べそれを日本語でまとめるタスク（文例「私の国には感謝祭がありますが、日本にはありません。」）を与える。

③ 東京観光日程表づくり

これは中級以上に課すタスクである。留学生と同世代向けに東京の一日観光を企画する。それまでの自分の経験、そしてクラスメートや友達にアンケートやインタビューをして、旅行会社のパンフレットのような日程表を作成する。若者に人気の場所を調べ、どうやってその場所へ行くのか、具体的な交通手段も記入し、実際に使用できる観光日程を要求する。



#### IV. 考察

本校の交換留学制度は英語圏の学校と提携を結んでいるが、留学生は様々な文化背景を持っている。カナダやオーストラリアで教育を受けている中国人・韓国人生徒が留学して来るケースも少なくない。英語話者であっても国や地域によって表現や発音が少しずつ異なり、留学生同士が休み時間にその違いを紹介しながら互いに理解し合う機会に何度か遭遇したことがある。留学生の教室はすでに異文化交流の場となっている。なお、2007年度より新校舎建築のため留学生の教室は存在しない。現在日本語クラスは図書館の一部を借りて行われている。日本語クラス以外はホームルームに戻り、昼休みはホームルームの生徒たちと昼食をとる。ホームルームで過ごす時間が多くあることは日本語上達のためにはいい環境である。しかしながら、ホームルームでは絶えず日本語に囲まれた緊張感があり、滞在日数が増すにつれ表現したいものが日本語で言えないもどかしさから留学生によってはそれがストレスになってしまうケースもある。留学生の教室は留学生同士でリラックスできる場でもあり、留学生にとってはよい環境であったと言える。

言語習得では実際に使える4技能（「聞く」「話す」「読む」「書く」）をいかに伸ばすかが問題となる。留学生の言語を学ぶ領域は大きく分けて、教室内と教室外の二つに分けられる。教室内とは日本語クラスを、教室外とは日本語クラス以外の環境、つまりホームルームや他の教科の授業、学校生活、通学経路、ホストファミリーとの生活空間などを指す。教室外活動は個々の留学生により異なった広がりを描く。

##### 1. 教室活動

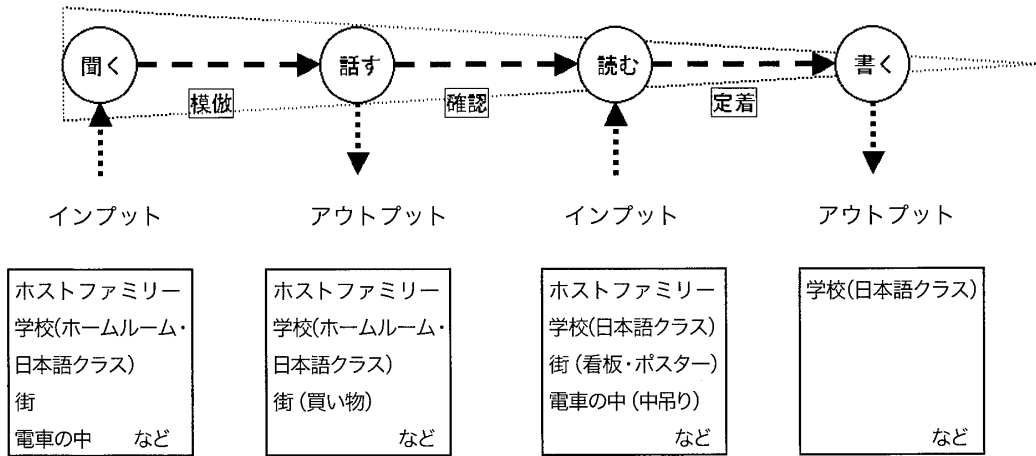
教室活動では、以下五つの事柄の提供が考えられる。一つ目は「リラックスと適度な緊張の場の提供」である。間違えを恐れず練習できるリラックスした空間を提供した方がいい反面、緊張感がなければ学習という形態から外れてしまう恐れがある。教員と生徒の間に早くから信頼関係を作り、緊張感の中にも、のびのびと学習できる雰囲気作りが大切である。二つ目は「練習の場の提供」である。文型や文字を覚えることは自律学習により独りでできることも多いが、それらインプットしたものをアウトプットする機会を与えることが大切である。聞き取り練習、口頭練習、読みの練習、書き取り練習などを通して、すでにある知識を学習者が外へ発する。誤りはその場で直して「化石化（fossilization. 不正確な発音や文法が定着してしまうこと）」を防ぐ。インプットとアウトプットのバランスよい練習が知識の定着につながる。三つ目は「整理の場の提供」である。インプットとアウトプットを繰り返しても、その場限りの練習に終わっては、定着は難しい。個々によって整理の仕方は様々であるが、この学齢期はまだ自分の言語学習戦略の確立には至っておらず、あるいは模索途上である。例えば、ノートの書き方、単語帳の作り方を一つの提案として紹介したり、留学生の中でまとめ方の上手な生徒のノートなどを紹介したりする。これは今までにも個人差、学校差が見られた。Oxford (1990) は、学習戦略の一つであるメタ認知戦略には「自分の学習

を正しく位置づける」、「自分の学習を順序だて、計画する」、「自分の学習をきちんと評価する」という三つがあり、これが4言語技能全体の向上に役立つとしている。留学生にこのストラテジーの概念を講義することはないが、意識的に授業に組み込み訓練させることが教員の役割ではないだろうか。SLAに必要なストラテジーの基礎を身につける場の提供となればと思う。四つ目は「学習意欲を引き出す場の提供」である。学習意欲を引き出すためには学習者に合った教材を用いることも一要因であろう。しかしながら、鳩（2004）が高校生レベルの教材の少なさを指摘している通り、中学生未満と大学生以上を対象にした教材の出版数に比べ、高校生用の教材は極端に少ない。年少者対象のものでは稚拙であり、成人対象のものでは難解すぎてしまう。現時点では教科書以外の教材は独自に作成しているが、実生活を意識して実際に役立つものを作成するように心がけている。また、授業の流れが単調であると学習意欲が減退することもあるので、画一化しないような工夫も行っている。学習意欲の継続のために、生徒を時には引っ張り上げ、時には下からあるいは周りから支えることが大切である。最後に「教室外活動へのリンク」である。教室活動は学習内容の提示が易から難へと並べられ、分かりやすく発音したり、板書は分かち書きをしたりとある程度日本語が調整される。一方教室外では自然な速度で話される、調整の効いていない日本語で溢れている。教室から突然教室外へ出ると、教室ではうまく話せたのに、全く話せなくて落胆してしまう場合もある。そこで、そのような衝撃を少しでもなくすために教室活動に教室外活動をリンクさせている。そのひとつが本稿で紹介したプロジェクトである。インタビューを通じて様々な人と日本語を使う機会を与え、徐々に慣れていくように意図的なコントロールを試みている。

以上、教室活動における試みをまとめてみたが、これは8時間の日本語授業と2～4時間の自習時間どちらにも起因する。特に自習の時間には自律学習を習慣づける意識的な指導が有効であると言える。

本校の日本語クラスでは、このように教室と教室外を意識的につなぎ合わせ、実践の場である教室外活動でより多くの日本語を使えるようなクラス運営を心がけている。また、4技能を意識した授業を行っている。つまり、「聞く」ことによりインプットした言葉を模倣により「話し」、アウトプットする。その言葉を文字として「読む」ことで確認を行い再度インプットし、「書く」という行為によりアウトプットし定着につなげるという一連の流れである。これは1週間の授業の流れに意識して組み込んでいる。「聞く」「話す」機会は教室の内と外ではその性質が異なるが、あらゆる見聞が留学生の糧となっている。以上を図に表すと図2のようになる。

図2 4技能を意識した日本語学習の課程



## 2. 教室外活動

教室は日本語の基礎力を養う場であり、外の世界から守られていることを考えると、一種のシェルターのような役割を持つ。一方教室外は実践の場、実際の世界であり、コントロールされていない生の日本語の飛び交う場である。教室で学んだことを実践の場で使用することにより、自信が付き真の言語習得へとつながる。教室外の世界は留学生を中心に日本の家族であるホストファミリーとの生活空間、ホームルーム、クラブ活動など学校生活中心の公の空間、その外側には観光や買い物などで訪れる公共の空間が存在し、その規模は外方向に無限に広がっていく。その異なった空間で使用する日本語には、異なる表現が存在する。校内では教科やクラブ活動に関連する言葉を多く使うであろうが、<sup>まちなか</sup>街中では、買い物に必要な表現や目的地を訪ねる表現などを中心に使用する。また、それぞれの留学生の興味により、覚える言葉や表現には違いが生まれてくるのは当然のことである。教室活動が無難にこなしているだけでは留学の意味がない。留学生がいかに貪欲に知識を広げていくか、そして、留学生をその方向に導けるかが最終的な指導の目標である。そして、この指導とは日本語教員のみならず、留学生に関わる全ての人々の支援と協力が相互に作用しているのである。

目白学園高等学校では、生徒・保護者の間で留学生の支援・後援の組織としての体制が確立され、主なものとしてクラブ活動の「国際文化部」とPTAの「国際交流委員会」がある。「国際交流委員会」は、保護者、留学体験者、海外からの留学生を受け入れた経験のある保護者や国際教育部の教員によって構成されている。主にホストファミリーの引き受け、留学生に日本文化の紹介などを行っている。「MOMの会」(留学・ホストファミリー経験者の会)も結成されて10年がたち、これまでに長期・短期でホストファミリーを引き受けた家庭は延べ390に上っている。

筆者は(森本)は「目白学園中学校・高等学校における異文化体験の実践的研究」(「目白大学短期大学部研究紀要」第40号)で留学生を受け入れた家庭について次のように記述している。

海外からの留学生の受け入れに関しては、PTAの「国際交流委員会」をはじめ多くの家庭の協力を負うところが大きい。留学生を受け入れた保護者からは、「留学生の自分のことは自分でするという姿勢によい刺激を受けた」、「子どもが大きくなって家族で一緒に何かをすることが少なくなっていたので、留学生を受け入れたことにより家族が再びまとまった」、「地域で開催している行事や活動に積極的に参加するようになった」という前向きな意見が多い。また日本のホストファミリーと現在でも家族ぐるみの付き合いを続けている留学生も多い。このような人的交流が草の根レベルの国際交流の架け橋となり、留学生の言語習得の一助になっていると言える。

### 3. 留学生の変化

今回、2002年4月から2007年6月までに本校に短期留学した生徒たちに留学後の追跡調査アンケートを試みた（資料4参照）。内容は以下4点である。一つ目は、留学後どのような形で日本語学習、あるいは日本語と関わっているか。二つ目は、留学後の日本との関わりについて。三つ目は、高校生で留学した利点（あるいは不利な点）について。そして最後に、目白学園の留学制度に対する意見や希望について、である。対象者54名のうち40名に連絡をしたが、回答率は30%（12名）であった。回収率の少ない理由としては、新学期前の忙しい時期であったこと、大学進学や自宅の引越しなどによる転居の可能性、または電子メールの未着や添付書類が正しく読めなかったなどの不具合が考えられる。

今回の調査の回答に、元留学生による自主的な報告も加え、アンケートの内容に従って4点を報告したい。まず、「帰国後の日本語学習」に関しては、皆一様に帰国後の学習に意欲的であることが伺える。留学後、留学前の日本語クラスに戻ったものの内容が易しすぎて、最終的には一番上のレベルに編入したこと、あるいは日本語能力検定試験2級に合格するといった報告もあった。留学中は英語での発話が目立っていたのに、帰国後送られてくる電子メールは立派な日本語を書いてくる生徒もある。大学で日本語を専攻して1年留学をしたり、日本語を使う仕事に就いたりしている者もいる。次に「留学後の日本との関わりについて」では、「JETプログラム」で外国語指導助手（ALT）として赴任したりするなど、自らの経験をもとに国際交流プログラムに携わっている者もいる。あるいは、留学生の国を訪れる日本人観光客への積極的なアプローチなども伺える。一方で周りに日本人や日本文化が存在せず、学習を続ける環境にない者もいた。三つ目の「高校生で留学した利点（あるいは欠点）について」では、圧倒的に利点を挙げている者が多い。その多くは親から離れて生活をして独立心を養うことができたことや、異文化で実際に生活をして日本文化をより理解できたこと、また、ある生徒は滞在中に大学の柔道部の練習に参加できたことで精神的に強くなったと言う。そして何より日本語を実際に使うことにより上達したことなどが挙げられている。最後に、「目白学園の留学制度に対する意見や希望について」は、全てが良かったとする意見の他、さまざまなことが挙げられた。この部分の回答に関しては、生徒により留学した事柄のみに焦点をあてて回答してい

る者と、自分の当時の状況を教育的観点から相対的に考えた上で回答している者がいた。日本語学習の見地では、文法や書く練習より「話す」ことに集中して欲しいという意見や学習ペースがもう少し速いほうが良かったという意見があった。これはレベルの異なる生徒が多い時期であったためと考えられる。また、このプログラムはよく考えられているという意見もあった。授業内容が理解できなくても、ホームルームの友達と一緒に教科学習を受けたかったというものや、校外学習は楽しかったが、できれば目白の生徒と外出したかったという意見もあった。また、日本以外の文化背景を持つ国際教育コーディネーターがいて欲しいというものもあったが、これは留学生滞在中に指導員が不在になった時期があり、それ以外は常駐しているので問題にはならないであろう。留学期間に関しては、最近受け入れた生徒からは「長い」という意見が多く、2002年から2003年頃に受け入れた生徒からは「短い」という意見を多く聞く傾向にあった。これは、自国の教育制度の変化が多分に影響していると言える。実際、10週間で日本語力は伸びても、他の教科学習の遅れを取り戻すのは困難なようである。

現在の受け入れ事情の変化に目を向けると、留学生は近年アジア系の生徒が増加傾向にある。特にカナダ、オーストラリアからの留学生にアジア系の生徒が多い。これは、家族による影響が大きい。韓国や中国では、「英語熱」が広まり、保護者がよりよい教育環境を求めて、子供たちをカナダやオーストラリアなどの英語圏に留学させることが広まっている。松本(2007)によると、高等教育以前の教育を目的とした海外移住の「教育移民」が韓国では年々増加し、その保護者を対象とした調査では「外国語習得」が一番の理由として挙げられている。本校の留学生には、英語の他に更にもう一つ別の外国語習得を希望する保護者が多いのであろう。或いは保護者が日本への留学経験があったり、日本語に関わる仕事をしていたり、日本食レストランを経営していたりするため、子供に日本語を習得させたいという考えも見られる。兄弟姉妹にも留学経験があり日本語を話すので、自分も話せるようになりたいという強い動機によることもある。さらに、カナダやオーストラリアに住むアジア系の留学生の生活圏に日本のポップカルチャー（漫画、ドラマ、J-POPなど）が浸透している影響もある。

しかしながら、「III. 2. (1) 10週間の学習プログラム」でも触れたように、留学生数はここ数年減少の一途をたどっている（資料2参照）。これは、各国の教育システムの変化が大きく影響しているようである。カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州では12年生（高校3年生）で受ける州統一テスト（Provincial Test）を、2004年以降10年生も受けることになり、留学すると教科学習の遅れを懸念するという声を聞くようになった。近年では母校の課題を多く持参する、あるいは電子メールで送られてくる留学生が多い。中には通信教育の形をとって日本での留學生活を送っていた生徒もいた。これは、アンケートの回答からも読み取れる課題である。

## V. まとめ

留学生の日本語習得は教室での学習を基軸に行われるが、教室活動をうまくこなす、すなわちテストでいい点数をとったり宿題を忘れずにしたりすることが目標ではない。その継続的な学習態度は学習者の言語学習ストラテジーを養う基礎的行為でしかない。教室外でのさまざまな刺激、影響、見聞を教室活動で理解、整理し、それを教室外、つまり実践の場で使用し定着につなげることが最終目標である。つまり、日本語クラスだけでは言語習得は成り立たない。ホストファミリーの協力、学校全体の支援、そして日本社会の教室外活動が相互に関わりあうことにより形成されていくと言えよう。

交換留学制度が始まってすでに20年近くが経過した。本校のみならずそれぞれの国の教育事情の変化により、送り出す学校にも当初の決定事項の踏襲だけでは生徒を派遣できない事情が生じてきている。2009年度には、本校も共学となり新しい体制となる。受け入れの新たな枠組みをそれぞれの姉妹校・提携校と見直す時期にあるのであろう。これまでに育ててきた留学生受け入れの体制は、国内における高等学校では恵まれた組織図を成すものである。今までに培ってきたものを内省しつつ、更なる充実を目指してよりよいものとしていきたい。

### 【参考文献】

- ・ Lenneberg, E. (1967). Biological foundation of language. New York: Wiley & Sons
- ・ Long, M. H. (1990). Maturational constraints on language development.  
Studies in Second Language Acquisition, 12, p.p.151-285
- ・ Oxford, R. L. (1990). Language Learning Strategies: what every teacher should know.  
Rowley, Mass: Newbury House.
- ・ Selinker, H. W. (1978). Implications of a multiple critical periods hypothesis for second language learning. In W. Ritchie (ed.) Second Language Acquisition Research. New York: Academic Press. M.
- ・ 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク
- ・ 田中望 (1988) 『日本語教育の方法 —コース・デザインの実際—』大修館書店
- ・ 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際 —学習支援システムの開発—』大修館書店
- ・ 鳩貴子 (2005) 「高校留学生の受け入れと日本語プログラム試案 —より望ましい日本語留学を目指して—」『2005年度日本語教育学会春季大会予稿集』社団法人日本語教育学会 p.p.137-142
- ・ 鳩貴子 (2004) 「高等学校における短期留学生の受け入れと日本語教育に関する調査研究 —受け入れガイドラインと日本語プログラム—」『南山日本語教育』第11号 p.p.159-191
- ・ 松本麻人 (2007) 「韓国社会における英語熱と学校教育」BERD No.8  
Benesse教育研究開発センター p.p.36-41
- ・ 村野良子 (2001) 『高校留学生に対する日本語教育の方法  
言語学習と文化学習の統合と学習支援システムの構築に向けて』東京堂出版
- ・ 山本紀美子・萩野誠人・浅井清子・吉田絹子 (1996) 『子供のための日本語教育』アルク

資料1

2007年4月～6月までの留学生の時間割（HR：高2-3）

	月	火	水	木	金
1	コンピュータ	コンピュータ	校外学習 ↓	コンピュータ	美術・工芸
2	保健体育（高2-3）	書道		日本語	保健体育（高2-3）
3	日本語	日本語		日本語	コンピュータ
4	日本語	日本語		日本語	英語（高2-3）
5	自習（図書館）	日本語		自習（図書館）	音楽
6	自習（図書館）	校外学習の 事前指導		英語（高2-3）	留学生HR

資料2

海外姉妹校・提携校一覧

カナダ 姉妹校		
West Vancouver Secondary School	ブリティッシュ・コロンビア州	ウェストバンクーバー市
Sentinel Secondary School	ブリティッシュ・コロンビア州	ウェストバンクーバー市
Collingwood School	ブリティッシュ・コロンビア州	ウェストバンクーバー市
Rockridge Middle School	ブリティッシュ・コロンビア州	ウェストバンクーバー市
Delta Secondary School	ブリティッシュ・コロンビア州	デルタ市
Seaquam Secondary School	ブリティッシュ・コロンビア州	デルタ市
Don Mills Collegiate	オンタリオ州	トロント市郊外
York Mills Collegiate Institute	オンタリオ州	トロント市郊外
Halifax Grammar School	ノバスコシア州	ハリファックス市
King's Edgehill School	ノバスコシア州	ウインザー市

オーストラリア 姉妹校		
St. Aloysius College	サウスオーストラリア州	アデレード市
Somerville House	クィーンズランド州	ブリスベン市
Ogilvie High School	タスマニア州	ホバート市
Pymble Ladies' College	ニューサウスウェールズ州	シドニー市郊外

ニュージーランド 姉妹校		
Waitaki Girls' High School	南島	クライストチャーチ市郊外
Takapuna Grammar School	北島	オークランド市郊外

イギリス提携校（派遣のみ）		
Cobham Hall	ケント州	コブハム市

## 資料3

## 年度別 国ごとの受け入れ留学生

年度	カナダ	オーストラリア	ニュージーランド	年度別計
1990	1	-	-	1
1991	4	-	-	4
1992	3	-	-	3
1993	7	-	-	7
1994	6	-	-	6
1995	4	8	2	14
1996	4	8	4	16
1997	9	7	4	20
1998	5	2	0	7
1999	6	8	3	17
2000	2	6	2	10
2001	8	6	0	14
2002	7	6	2	15
2003	8	4	0	12
2004	6	6	2	14
2005	4	3	0	7
2006	4	0	0	4
2007	3	2	0	5
総計	91	66	19	176





3. Do you use Japanese now?

Yes / No

If Yes,

a) When do you use Japanese mainly? (e.g. daily conversation in the office, reading documents)

---

---

---

b) What is your Japanese level (roughly)? \_\_\_\_\_

If No,

a) Why? \_\_\_\_\_

---

---

4. Was the 3 month (or 10 week) exchange program a sufficient period or too short? Please explain your answer.

---

---

---

5. Did your study abroad benefit you? Please describe anything gained during your time in Japan in addition to any language ability you believe you received. E.g. motivation, maturity etc.

---

---

---

---

6. Do you have any request (s)/ advice for Mejiro Gakuen's exchange program? E.g. I wanted to study... I wish I could have...

---

---

---

---

Thank you for your time and cooperation.

*Mejiro Gakuen High School*